

# ホイットマンのカタログの由来について

山 内 彰\*

## Walt Whitman's Catalogue

Akira Yamauchi

**要旨：**ウォルト・ホイットマンはその多くの詩において、過剰ともいうべき物事の羅列を試みた。いわゆる「カタログ (catalogue)」と呼ばれる文体であるが、このような文体をなぜ詩人が多用したのかについては、さまざまな解釈がある。本論ではそうした過去の解釈を紹介するとともに、あまりこれまで指摘されてこなかった博物学がカタログに与えた影響についても検証している。この目的のために、ホイットマンのノートや詩を引用しながら、博物学をどのように取り込んだのかを検証した。ホイットマン独特の文体である「カタログ」について、その由来がどこにあるのかを多角的に分析するのが本論のねらいである。

**Abstract :** Many critics have noted Walt Whitman's unique style, in which the poet lists up so many things and objects and depicts them as they are. This style is called "catalogue," "list," or "enumeration." This thesis focuses on why this particular style is adopted in Whitman's poems. After examining the past theories and opinions of this catalogue's origin, the relation between Whitman's poems and natural history is also pointed out. The reason why Whitman uses this technique is deeply analyzed with the use of his poetry and his notebooks.

**Key words :** アメリカ文学 American Literature ホイットマン Walt Whitman  
カタログ Catalogue 博物学 Natural History

### I カタログという技法

19世紀のアメリカを代表する詩人であるホイットマン (Walt Whitman) は、アメリカという国のあらゆる様相を詩の内部に取り込もうとして、「カタログ」といわれる技法をその詩のなかで多用した。これは、事物をそのまま詩行に書き写し、列挙するという詩法である。その具体例として、「A Woman Waits for Me」という詩の一部をみてみよう。

Sex contains all, bodies, souls,  
Meanings, proofs, purities, delicacies, results,  
promulgations,  
Songs, commands, health, pride, the maternal  
mystery, the seminal milk,  
All hopes, benefactions, bestowals, all the pas-  
sions, loves, beauties, delights of the earth  
(Bardley 101)

ここでは、「性」がどのようなものを含んでいるかを述べているのだが、それは「性」を定

---

\*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

義したり、描写しようとしているというよりも、「性」に関わる属性を羅列している印象を受けるだろう。複数形の名詞を利用し、“all”という単語を複数回使用するなど、内容をしっかりと描写しているというよりも、「性」に関わる語彙をリストアップしているように思われる。

このように、事物を詩行に書きとり、数行にわたって記載してゆくという特有の方法が、「カタログ」である。この技法は、事物を次から次へと挙げてゆくことから「リスト (list)」だとか、「数え上げ (enumeration)」とも呼ばれている。ホイットマンの詩にはこのカタログがきわめて多く登場し、次々に事物を列挙してゆくため、あまり評判のよいものではなかった。たとえば、ある批評家は「ウォルト・ホイットマンの本の四分の三は、オークションのカタログが詩だと言えるのなら、詩だと言えらう」(Asselineau 73)と痛切に批判している。また、パークはホイットマンのカタログはまるで「電話帳」のようであり、「飛ばし読み」したくなる (Hindus 97) と、述べたことがあった。

確かにこのカタログは延々と何行にもわたって続き、読者を辟易とさせるものがあるのだが、それではなぜホイットマンはこのような技法を自分の詩作の中心に据えたのだろうか。この文学史上きわめて特異なスタイルがなぜ生み出されたのかについて、さまざまな見解が示されている。本論は、その見解を検証するとともに、博物学の影響についても考慮した新しい視点を追究するものである。

## II 民主国家を表すものとしてのカタログ

ホイットマン文学を特徴づけるカタログという文体は、いかにして生まれてきたのだろうか。ときに評判のよくないこのスタイルが、しかしながら、彼の文学の特色である以上、その起源について関心を寄せる学者は少なくない。

まず、カタログという文体は、アメリカとい

う民主国家における多様性を表現するために生み出されたのだという説についてみてみよう。彼の創り出した独特の文体であるカタログは、それまでの伝統的文学においてあまりみられぬものであり、そのことからしても、アメリカという新興国の始まりを象徴していると考えられる説である。

さて、カタログという技法が、アメリカ的な民主主義を体現しているという見解を考えるにあたっては、ホイットマンの歴史観を検討してみる必要があるだろう。彼の基本的な歴史観によれば、19世紀中葉のアメリカとヨーロッパは対照的な世界であるとされる。たとえば「(イギリスの) 政府はむくんだ寄生虫と大仰な貴族どもに蝕まれている」(Marinacci 64)と書き、こうした「反民主的な権威」はすでに過去のものだと記している (Bardley 750) が、これはアメリカが民主主義を代表する国家であるのに対し、イギリスは貴族主義の国家だという図式を表したものである。そして、アメリカこそ民主主義の国であり、人類の希望であるとされ、アメリカは詩のなかで次のように歌いあげられている。

O America because you build for mankind I  
build for you (Bardley 346)

ヨーロッパは確かにこれまで文化的先進地域であったが、人類の未来はこれを受け継ぐアメリカのものだとホイットマンは主張する——「英国の詩人には思い出があり、いつもそれを賛美している。アメリカの詩人には未来があり、それを称えねばならない」(Cady 237)。ヨーロッパの貴族主義は終わりを告げ、代わりに、アメリカが人類の未来を担うのであった。彼にとって、歴史はヨーロッパとアメリカの対立という枠にそって考えられるべきものであり、彼の詩はヨーロッパにはないアメリカ特有の価値観を広めるために書かれたものである。ホイットマンは、次の詩にもあるように、「ア

メリカを定義する」ため、「民主主義を定義する」ため、詩作活動を行ったのである。

I heard that you ask'd for something to prove  
this puzzle the New World,  
And to define America, her athletic democracy,  
Therefore I send you my poems that you behold  
in them what you wanted. (Bardley 3)

「新世界」がどのような場所なのかという「謎」を解明すべく、ホイットマンは「アメリカ」を、その「民主主義」を定義してみせたわけである。ヨーロッパにおける抑圧的で専制的な政治にかわって、民主主義を標榜するアメリカこそが、新しい時代の担い手であるというのがホイットマンの主張の要旨であろう。もちろん、こうした見解を唱えたのは、一人ホイットマンだけではなく、当時のアメリカでは広くみられた考え方であった (Hofstadter)。ただ、ホイットマンにおいて独特なのは、ある時代とその時代を生きる人間はつねに並行関係にあり、該当する時代と人物は一体のものとしてとらえられていた点である。たとえば、過去の出来事は「その時に一番ぴったり適合していた」(Bardley 711) とされ、「最良の詩とは、要するに[・・・] その時代と場所に適合した最も完璧な美を備えたもの」(Trimble 72) のことであると主張されている。ホイットマンにとって、すぐれた文学とはその時代の要請に適切に応えることのできるものでなければならなかった。

1840年代にはオーソドックスな詩を発表していたホイットマンも、新聞記事やノートの中なかでは、ヨーロッパ的伝統から離れた、アメリカ独自の表現方法を希求していた。彼はノートのなかで、ホメロスやシェークスピアの文学を真似するのに反対し、「僕自身の方法による大家」になりたいと綴っている (Perry 69-70)。また、『草の葉』出版以前にも「ヨーロッパの王侯貴族の制度や文体を範にとつてはならない」(Perry 71) と認めているように、ヨーロッ

パ的な文学手法から離れ、アメリカという新国家に適合する文体を探していたことは明らかである。1855年に自ら書いた『草の葉』の宣伝文のなかで、「この著者〔ホイットマン自身のこと〕からは古い種族のしゃべり方や詩の韻律は少しも聞こえてこない」(Hindus 35) と記し、1856年には「詩の理論と実践は、これまでのところある考えや出来事や人物を選び出し、続いてそれをできるだけうまく描写することだと[・・・]されてきたが、これは新しい詩人の理論や実践ではない」(Hindus 44-45) と、自分とこれまでの詩人とのあいだに鮮明な違いを意識して書いている。そして、そのために、新しく創造された文体が、カタログであった。この文体を用いることで、従来のヨーロッパの伝統的文体にはみられなかったような「しゃべり方や韻律」を彼は創り上げたのであり、「新しい詩人の理論や実践」を実行したのである。

「すべての詩やその他の文学的表現で、その作家の現実の生活や知識にそぐわないものは、すべて虚偽である」(Zweig 290) と主張するホイットマンにとって、アメリカという国の「現実の生活」に適合するものとして、カタログという文体が創造され、それが民主主義と結合しているのである。アメリカと民主主義が密接な関連性を有するのは、「アメリカと民主主義という言葉置き換えのきくものとして私は使おう」という『民主主義展望』のなかの一文をみても明らかである。民主主義の基本的精神の一つが平等であるならば、一つとして余さずなかに含み、しかも同じレベルで関心を要求するカタログという文体は、きわめて民主主義的精神を有していると帰結できるだろう。ダウデンは、この点を次のようにまとめている。

誰ひとりとしてただ一人だけでは、ホイットマンの歌のテーマにならないし、そのようなことはありえない。個人は集団を暗示し、集団は多数を暗示している。そのなかのどの

単位も他のすべての単位と同じくらい関心を惹き、同じだけ認知される権利がある。そういうわけで、ホイットマンの詩が人物のカタログになってしまう傾向が生まれてくるのである。(Dowden 43)

つまり、ダウデンによれば、カタログという文体のなかに表現された人物は、すべて一つのまとまりを暗示しながら、なおかつ、一つ一つが同じだけの注意を喚起できるものとして描かれているということになろう。ホイットマンが「個人主義という孤立する側面だけでは一面にすぎない。もう一つの面、すなわち、愛の面が存在し、それは溶解し、結びつけて、集合させる。人類を友人と詩、すべてを友愛で満たす」と定義した民主主義の二つの契機と、ダウデンの見解は重なってくるのである。また、アレンも言うように、「単位が調和し、差異が抹消され、すべてが同義的で、『民主主義的』な構造のなかに、一緒にはいりこんでゆく文体」(Allen 215) が、アメリカを描くのに必要とされたのである。

このように、ホイットマンのカタログという独特の文体は、アメリカという新しい民主国家を描くために必須のものであり、当時のアメリカに完全に適合する形態として生み出されたといえるだろう。つまり、カタログとは、いかにもアメリカ的で、独創的な文体なのである。

### Ⅲ 拡張を表すものとしてのカタログ

だが、これだけがカタログという文体の発生の契機となったと断言するわけにはゆくまい。こうしたアメリカ特有の歴史的事情がカタログなる文体を生み出す背景にあったことは間違いないとしても、それだけではないと思われるからである。では、ほかにどのような要因が考えられるだろうか。

#### 1 西漸運動

よく指摘される要因として、19 世紀中葉に

アメリカ社会で大きく報じられ、また、当時たいへん多くの人々に影響を及ぼした西漸運動という歴史的出来事がある。周知のように、アメリカは東部の州のイギリスからの独立に始まるのだが(ネイティブ・アメリカンの歴史を今は除外して考えている)、その人口の波は西へ西へと延びて行った。これがいわゆる西漸運動と呼ばれるもので、アメリカ的特質を成立させた重大な歴史的事実であった。この西漸運動が、19 世紀の作家たちの創造力を刺激し、特有の感覚をはぐくむことになった。そして、この運動の影響がホイットマンにもみられると考える学者もいる。確かに、ホイットマンの詩には移動をイメージさせるものが多く、とりわけ地理的な移動を伴った描写は多い。たとえば、有名な“Passage to India”という詩は、次のように終わってゆく。

Sail forth – steer for the deep waters only,  
Reckless O soul, exploring, I with thee, and  
thou with me,  
For we are bound where mariner has not yet  
dared to go,  
And we will risk the ship, ourselves and all.  
  
O my brave soul!  
O farther farther sail!  
O daring joy, but safe! are they not all the seas  
of God?  
O farther, farther, farther sail! (Bardley 421)

この最後のスタンザでは、「さらに向こうへ船をくりだそう」だとか、「探検する、危険をものともせぬ魂よ」であるとか「さらに遠くへ、遠くへ」といった表現からも分かるように、目的地へ向けて進んでいく様がみてとれる。ここには、アメリカの開拓者の精神であるパイオニア精神を読み取ることもできるだろう。このように、彼の詩には西へ向けてアメリカ大陸を開拓してゆく動きが反映されていると

考えられ、その動きを表すため「カタログ」という手法が用いられたと考える批評家が多いのである。

## 2 「私」との関係

だが、こうした西漸運動の影響があるとしても、それだけで詩人の描きだす「私」の果てしない広がりの説明することはできないだろう。ホイットマンが表現しようとしたのは、歴史的な流れであるというだけでなく、もっと「私」を中心とした主観的世界でもあるからである。では、ほかにどのような見解があるのだろうか。

ホイットマンのカタログを考える際に大いに参考になるのが、アレンの見解である。彼は、歴史的な背景をもその解釈の内部に取り込んで、カタログの技法を考えている (Allen 211 ff)。アレンによれば、ホイットマンの描く「エゴ (ego)」は単一の対象物に同一化してしまうのではなく、「つねに動いており、ハチドリよろしくあるものから別のものへ、ある場所からほかの場所へ驚異的な速さでひらひらと移ってゆく」。言い換えれば、このようにしてホイットマンが描きだしてゆく「イメージはパノラマのようであり、終わりがなく、流れ、拡張してゆく」(Allen 212)ものだということになるだろう。そして、彼はこうしたホイットマンに特有の観点を、神秘主義や表現主義 (expressionism) などと対比させて考察を進めている。もっとも、アレンはさまざまな影響関係を指摘することに重きを置いており、特に1つの要因に結び付けて議論を進めているわけではない点には注意を払わねばならない。

## 3 神秘主義との関係

アレンの指摘した観点のうち、神秘主義という側面に光を当てて分析を行ったのが、チャリ (V. K. Chari) である。彼は、ホイットマンの描くカタログが統一的に成立しているのは、「私 (I)」の視点によってだけであることを指

摘している。そして、「私」という自己の膨張にこそ、ホイットマンのカタログの由来があるのだと考えている (Chari 50-1)。たとえば、「Song of Myself」の次の部分を見てみよう。ここで、ホイットマンは「私」であるものを羅列している。

Comrade of Californians, comrade of free  
North-Westerners, (loving their big proportions,)

Comrade of raftsmen and coalmen, comrade of  
all who shake hands and welcome to drink  
and meat,

A learner with the simplest, a teacher of the  
thoughtfullest (Bardley 45)

このカタログは十数行にわたって展開されているのだが、その最後には「私のこんな多様性には、私自身どうにもならない」といわれている。あまりに「私」が多様な存在であるため、収拾がつかなくなっているということであろうが、ここに典型的にみられるように、ホイットマンの「私」は通常想定されている主体の領域をはるかに超えて広がってゆく。「私」は「カリフォルニアの友人」であるだけでなく、「学者」でも「教師」でもあるのだから、「私」の同一性は異様な広がりをもっているといわねばなるまい。

こうした点をとらえれば、「私」が膨張し、拡大する存在である以上、その過程をていねいに表現しようとするれば、その体験の羅列にならざるを得ず、それがカタログという文体の契機となっているのだというチャリの見解もあながち誤りとはいえないであろう。

だが、チャリはこの「私」のみせる膨張を、神秘的な理由にばかり帰しているわけではない。彼は、当時の天文学の影響をも考慮し、「天文学は[・・・]ホイットマンの膨張する自己にかぎりない広がりを与えている」(Chari 101)と述べている。この点は、ホイットマン

自身が「本の中で歴史、地理学、民俗学、天文学を扱う新しく適切な方法。長いリストを用いて」(Zweig 189)と記述しているのと比較してみると、たいへん興味深い。ホイットマンはカタログという文体を使うにあたって、事物をリスト化することにより、さまざまな学問領域を詩の内部に取り込もうとしていたのがわかるからである。

#### 4 読者との関係

ホイットマンは「長いリスト」を用いて、詩のなかで表現を試みたわけだが、このことはこれまでに検討してきたように、民主主義的な言説、西漸運動の影響、神秘主義、科学といったさまざまな要因を契機として成立してきたことがわかるだろう。だが、この「長いリスト」には、読者を辟易させる部分もあることも事実であって、科学的な影響を受けているためか、驚くほど抑揚のない羅列が問題視される場合もある。ブラック (Stephen A. Black) は「カタログの多くにみられる最も興味深い側面は、それが表すものの感情面における平板さである」(Black 40-1)と、この点をまとめている。バークがカタログを電話帳にたとえたように、ホイットマンの描くカタログの多くは、不思議なほど中身がなく、事実の羅列のみを目的としているかのような印象を読者に与える。

House-building, measuring, sawing the boards,  
Blacksmithing, glass-blowing, nail-making, co-  
opering, tin-roofing, shingle-dressing,  
Ship-joining, dock-building, fish-curing, flag-  
ging of sidewalks by flaggers.  
(Bardley 216)

上の“A Song for Occupations”にみられるカタログは、何を目的として並べられたものなのか、読者はいぶかしく思うことだろう。こうしたホイットマンのカタログの特色は、先にみたような「民主主義的」な理想を表しているだと

か、西漸運動の影響であるとか、「私」の神秘的な拡張を表現しているといった観点からは説明しにくいものに思われる。こうしたカタログは、有機的な意義を詩集全体に与えているというよりは、平板で単調で退屈な作業を読者に要求しているようにすら思えてくる。メイソン (John B. Mason) は、この点をとらえて、この単調さこそホイットマンのカタログのねらいであるという、これまでにない考えを主張している。彼によれば、ホイットマンの長い平板なカタログは、読者がそれを「集約」するか、「一般化」するか、どちらかの作業を行うことになり、それこそ詩人が読者に期待しているものであるというのである (Mason)。言い換えれば、カタログによって、読者は積極的に詩の読みにかかわるわけであり、カタログはそのための技法であるというのである。

#### IV 収集する欲望

“Beginning My Studies”という詩のなかで、ホイットマンは自分の研究方法を次のように描いている。

Beginning my studies the first step pleas'd me  
so much,  
The mere fact consciousness, these forms, the  
power of motion,  
The least insect or animal, the senses, eyesight,  
love,  
The first step I say awed me and pleas'd me so  
much,  
I have hardly gone and hardly wish'd to go any  
farther,  
But stop and loiter all the time to sing it in ec-  
static songs.  
(Bardely 9)

ここにおいて、彼は自分が「事実意識」に基づいて「最も微小な昆虫」をも取り上げること、さらには、「それ以上に進むことはまずない」ことを明らかにしている。このホイットマ

ンの研究方法を表現したと思われる詩は、何を意味しているのだろうか。事実そのものに固執し、あくまで1つ1つの個物にこだわり続けることを「事実意識」と呼ぶのなら、まさに彼の用いたカタログという文体は、この事実意識を具現化するための装置といえるだろう。けれども、ここで問題となるのは、感情的起伏を犠牲にしてまで、なぜ彼がこうした事実意識にこだわったのかという点である。なぜホイットマンは「第一段階」に固執するのだろうか。

“By Blue Ontario’s Shore” という詩のなかで、アメリカにふさわしい詩人をホイットマンは次のように定義している。

Can your performance face the open and the  
seaside?

Will it absorb into me as I absorb food, air, to  
appear again in my strength, gait, face?

(Bardley 350)

アメリカにふさわしい詩人は、「食べ物」を「吸収」するように、アメリカという国にみられるさまざまな事物を「吸収」できなければならないのだと、ホイットマンは主張する。彼にとって、詩人とはアメリカという新しい世界を取り込み、吸収し、それを表現できる存在のことであったのである。すなわち、詩とは、外界を飲み込み、写し取り、表現する過程を意味していたといってもいいだろう。だから、この「吸収」という言葉は、別の詩では「刷り込み」と表現されるのである。

Once I pass’d through a populous city imprint-  
ing my brain for future use with its  
shows, architecture, customs, tradition

(Bardley 109)

「私」は「たくさん人間がいる都市」をぶらつき、そこで目にしたものを「将来使うので頭のなかに刷り込んで」おく。目にしたものは

すべて詩の素材となりうるものであるから、あらゆる対象は「吸収」され、「私」のなかに「刷り込まれ」る。言い換えれば、どのような些細な事物であっても、それが将来詩で表現される可能性がある以上、見逃すわけにはいかないのである。

このすべての事物を微細なものにいたるまで収集し、刷り込み、表現されたものが、カタログであり、リストだということになるのだろう。ホイットマンが暮らしていた当時のブルックリンやニューヨークには、こうした題材があちこちに転がっていたらしい。詩人となる以前の新聞記者時代に彼が書いた記事のなかにも、そうした事物をリストアップしようとした様子がうかがわれる。たとえば、ニューヨークの市場で売っているものを評して、彼は「すべての長いリスト」(Allen 20) という言葉を使っているし、1856年には「さまざまな光景を数え上げる (enumerate)」(Holloway 122) わけにはゆかないのでと、新聞記事で述べている。また、「今回はわが公共施設のリストと描写を行うスペースがなかったが、近々行く所存である」(Christman 57) とも書いている。このように、大都市をぶらつき、そこでみたすべての事物を大小関係なくリストにしまおうというホイットマンの欲望は、すでに新聞記者時代から育まれていたのだといってもよいだろう。いわば、すべてを頭のなかに刷り込み、吸収しようとする試みが、こうした事物のリストを作り上げようとする動機になっているのであり、それらは「工業製品のリスト」(Christman 53-4) として、彼の頭のなかに刻みこまれていったわけである。

詩人は大都市に溢れんばかりに並べたてられた商品やその光景そのものに目を奪われているのである。もちろん、これには歴史的にみて、市場化してゆくアメリカ社会の影響をみてとることもできるだろう。事実、1857年には、アメリカ社会にこれまでなかったような商品が溢れてゆく様子にふれて、「ここ十年ほどのあい

だにつくられた趣向品やぜいたく品といった数えきれないほどの品々について考えてごらん下さい」(Zweig 291)と読者に促している。さらに、大都市の内部にはさまざまな商品が溢れ、町中で「あらゆる種類の商品や人間」をみることができるとも書いている (Rubin 18)。ニューヨークへやってくる人々は、そうした商品や飾りつけによって「目がくらくらする」のを体験するだろうと、ベルデン (Belden) も 1848 年に述べている (White 22) が、ホイットマンも同じような点を次のように記載している。

初めてここ (ニューヨーク) へ生活をしにきて何週間か過ごしたとしても、あいかかわらず何百という素晴らしいものや驚くべきものを目にするだろう。 (Rubin 17)

このように、都市に溢れるさまざまな事物をその細部にいたるまで頭のなかに焼き付け、それを詩として表出することが彼の目的の一つだったのだろう。その点について、ホイットマンは詩のなかで、次のように表現している。

O I will make the new bardic list of trades and tools! (Bardley 601)

「詩人のリスト」をつくりあげること、彼の詩作のなかで重要な位置を占めていたのであろう。だが、こうしたさまざまな事物のリスト化は、一人ホイットマンのみのものではない。フランスの有名な詩人ボードレール (Pierre Charles Baudelaire) の次の記述と比較してみると、その点がよくわかるだろう。

大都会が捨てるあらゆるもの、それが失うあらゆるもの、それが軽蔑するあらゆるもの、それが踏みつけるあらゆるものの目録を彼 (近代詩人) は作り、収集する。

(ソング 86)

ボードレールはデカダンスの視点から「目録」作りのための「収集」に励んだのに対し、ホイットマンはアメリカという新しい国作りの観点から「リスト」作りに精を出す。市場化・都市化によって急激に増えてきたものや人間の数が、近代を歌う詩人にとってきわだって興味深いものとなり、それを数え上げ、取り上げて、詩として表現することが重要な作業に思われたのであろう。

そして、このようにすべてを細部にいたるまで収集し、刷り込んでおくという行為は、詩人みずからを 1 つのギャラリーとする比喩へと進んでゆく。ホイットマンは、“Pictures” という詩のなかで、自分の頭の内部をギャラリーにたとえて、次のような詩を書いている。

In a little house pictures I keep, many pictures hanging suspended – It is not a fixed house,  
It is round – it is but a few inches from one side of it to the other side,  
But behold! it has room enough – in it, hundreds and thousands, – all the varieties. (Bardley 642)

詩人の頭は「わずかなインチしかないけれど」、「十分なスペース」があり、そこには「多数の写真が掛けられている」と、ホイットマンはいう。詩人の頭の内部には、都市や市場で目にした多数の事物がきっちりと収集され、刷り込まれ、詩に表現されるのを待っている。外界でみたものを一つ残らず蓄積し、それを表現するのが詩人であるとするれば、詩人の頭をギャラリーに譬えるのも理解できる場所である。

だが、こうしたギャラリー化した詩人の頭の内部は、ただ市場化・都市化によってもたらされたのみではない。そこには、欧米で発生し、ホイットマン自身がたいへん注目していた博物学の影響があったと考えられるのである。そこで、次節ではその点についてみてみよう。



## V 博物学的欲望

“Beginning My Studies”という先に検討した詩のなかに「最も微小な昆虫」に関心を抱くという詩行があったが、こうした関心の抱き方は文学者というよりも、むしろ昆虫学者に近いのではないだろうか。事実、ホイットマンは昆虫学者をまねようとしていたのであり、そのことは彼の次のメモ書きに明らかだろう。

昆虫に関する詩。アルカースト氏からすべての昆虫の名前を聞き出しておくこと——適切な一連の考えを織り交ぜておくこと——一連の単語も忘れずに。(Stovall 153)

この記述は、彼が科学的知識を積極的に詩作に利用しようとしていたことを明示している。ホイットマンは昆虫学者にならって、昆虫の名前や考えを学び、それを詩として表現しようとしていたわけである。

また、こうしたことは昆虫学に限られているわけではない。歴史についても同様で、彼は歴史年表を示した後で、「以下のことは[・・・]ほぼ真実だと思っていただいいてよいいくつかの事実や要点のリストである」(Holloway 33)と書いている。自然や人間の歴史についても、必要な項目を収集し、リストを眺め、それを表現しようとしていたことになる。この心理構造は、博物学の目録作成の精神にも似ているのではあるまいか。

リンネは、地球上のすべての種の数、動物も植物も一万程度と見積もっていたので、一人でもその目録を作成できると考えており、彼自身がこの仕事を完成させるために神に選ばれた者であると自負していた。(松永 81-2)

この文章はリンネについて述べられたものであり、ホイットマンについてのものではない

が、昆虫について名前を聞き出し、さまざまな事物のリストをつくり、それをカタログとして詩のなかに取り込んでゆく姿は、リンネときわめてよく似ているといえるだろう。いわば、博物学者たちが全世界の事物の目録を作成しようという欲望にとりつかれたように、ホイットマンもアメリカという新世界を表現するあらゆる事物の収集にとりつかれたのではないだろうか。

博物学は、単に地球の財産しらべを行う学問ではなかった。自然と生物に親しく接し、政治とか宗教とかの色めがねを外した純粹に物質的な自然を記述すること、その自然が私たちの心に送りこんだイメージ——あるいは人間の詩的想像力の源を解明することが、いわゆるナチュラリストたちにまかされた役割だったのだ。(荒俣 18-20)

博物学をこのように解釈するならば、ホイットマンがなぜ大都市を歩き、そこここにある品々を頭のなかに刷り込み、また、昆虫やさまざまな事物に興味を抱いてリストを作り上げていったのかが理解されるだろう。彼は、事実、当時のアメリカにあった数多くのダゲレオタイプのギャラリーや博物館を巡って刺激を受けているが、たとえば、エジプト博物館に行ったときのことを次のように書いている。

今言ったように、私はエジプト博物館に何度も足を踏み入れた。ときには私一人しかいないということもあり、驚くべきカタログに見入ったこともある。(Holloway 28)

博物館において目にした「驚くべきカタログ」に魅せられたホイットマンは、同じように、アメリカにある事物を頭のなかに刷り込み、収集し、吸収したのだろう。そして、そうしたリストをカタログという手法で詩のなかに再現したのである。そう考えれば、これまで多

くの学者を悩ませてきた “I Sing the Body Electric” という詩の § 9 の意味が理解されてくるのではないだろうか。

Head, neck, hair, ears, drop and tympan of the years,  
Eyes, eye-fringes, iris of the eye, eyebrows, and the walking or sleeping of the lids,  
Mouth, tongue, lips, teeth, roof of the mouth, jaws, and the haw-hinges (Bardley 93)

ここでは人体の各部が羅列されているのだが、いったい何が目的でこのようなカタログがつくられたのか意味が不明であった。この部分に、民主主義的な意義や、神秘的解釈を持ち込もうとしても無理があるし、また、感情的な平板さを通り越して読者を苛立たせるばかりである以上、読者による共同作業を誘っていると強引に解釈するわけにもゆかない。この部分は、ある種の博物学的欲望とでも呼べるものに基づいて描かれているのであり、人体の「驚くべきカタログ」を詩の内部に取り込もうとしているのだと解釈されて初めて、意味を理解できると考えられる。この詩の部分と、ホイットマンの博物学的欲望を露わにしている、「最新の一番いい解剖学の著作を読むこと。医者と話をする。人体解剖図を研究すること」(Stovall 152-3) という記述を比較すれば、なおそのことがはっきりと理解されるだろう。ホイットマンは、人体の各部の名称をカタログすることで、詩集の内部に人間の肉体という事物の 1 つを再現しようと試みたのである。

## VI 結 論

ホイットマンの詩を特徴づけるカタログという文体は、どうして形成されたのだろうか。この問題は従来から学者の多くの関心呼び、さまざまな説が提唱されてきた。まず、新興国家アメリカの精神にふさわしい民主主義的なあり方を表現するためであるという説。また、「私

が世界へと拡張し、世界を取り込み、表現しようとするのだという神秘的体験を重視する説。さらには、感情的な平板さを取って読者に体験させることにより、読者を読み行為へと誘おうとする説など、さまざまである。

これらの説はそれぞれ一理あるといえるし、完全に否定してしまう性質のものではない。しかしながら、こうした解釈ではとらえきれない詩行が存在していることも確かである以上、それを説明する考え方として、当時ホイットマンが魅了されていた博物学的欲望とでも呼ぶべき目録やリストの影響をみるのも同様に妥当なことであろう。

だが、そもそもなぜホイットマンはこうした博物学的欲望とでもいうべき「刷り込み」や「吸収」、「リスト」といったものに夢中になったのだろうか。彼は「すべてのものは、私にとって書かれたものであり、それが何を意味するのか私は把握しなくてはならない」(Bardley 47) と書いたことがあったが、ホイットマンにとって世界とは書かれたものであり、「草の葉」という言葉自体が「象形文字」(Bardley 34) として表現されている。したがって、象形文字の意味を読み取ることに、ホイットマンの眼目があったのかもしれない。だが、その際に、基盤となるのはこの現実世界であり、人々が行き交う都会であり、人間の歴史であり、自然事物なのであって、この現実世界をしっかりと把握することがまず必要とされたのであろう。それが「事実意識」であり、「第一歩」と詩のなかで指摘されていた点である。

そして、ホイットマンは読者にも同じ作業を期待する。彼が文字にして閉じ込めた意義を詩集の内部で探り当てるという「読者には果たすべき役割がある」(Bardley 570) わけだ。それは、メイソンが主張したようなカタログを要約する作業といった単純なものではなく、カタログを通して詩の中に再現された世界の意味を読者が取り出すことにほかならない。エマソン (Ralph Waldo Emerson) は、かつて「単なる言

葉のリストも想像力があり、活動する精神にとってはなかなか暗示的だとわかるものだ」(Orvell 334) と語ったことがあったが、まさにホイットマンが読者に求めていたのも、こうした「想像力があって、活動する精神」なのだろう。

ホイットマンのカタログという文体は、アメリカ的なもの、民主主義的なものを表すと同時に、神秘的な「私」の拡張体験でもあり、また、読者を詩集の内部に誘う装置でもある。だが、そればかりではなく、さらにいって、博物学的欲望とでも呼ぶべき、世界を徹底的に頭のなかに刷り込み、吸収し、目録にしてゆく作業とも深い関連性を有している。万物の意味を探り、収集し、リストとして詩の内部に表出するというこの文体は、ホイットマンにきわめてユニークな文学的地位を与えると同時に、われわれ読者にも世界の意味を考え直す契機となっているのである。

#### 文献

- Allen, Gay Wilson. *The New Walt Whitman Handbook*. New York: New York UP, 1986.
- 荒俣 宏『目玉と脳の大冒険－博物学者たちの時代』ちくま文庫 1992年。
- Asselineau, Roger. *The Evolution of Walt Whitman: The Creation of a Personality*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard UP, 1960.
- Bardely, Sculley and Blodgett, Harold W. ed. *Leaves of Grass* by Walt Whitman. New York, W. W. Norton & Company, 1973.
- Black, Stephen A. *Whitman's Journeys into Chaos: A Psychoanalytic Study of the Poetic Process*. Princeton: Princeton UP, 1975.
- Burke, Kenneth, "Policy Made Personal: Whitman's Verse and Prose – Salient Traits," in *Leaves of Grass: One Hundred Years After*, ed. Milton Hindus. Stanford, 1955.
- Cady, Edwin H. and Durham, Lousi J. Budd ed. *On Whitman: The Best from American Literature*. Durham: Duke UP, 1987.
- Chari, V. K. *Whitman in the Light of Vedantic Mysticism: An Interpretation*. Lincoln: U of Nebraska

- P, 1976.
- Christman, Henry M. ed. *Walt Whitman's New York: A Collection of Walt Whitman's Journalism Celebrating New York from Manhattan to Montauk*. New York: The Macmillan Company, 1963.
- Dowden, Edward, "The Poetry of Democracy: Walt Whitman," in *A Century of Whitman Criticism*, ed. Edwin Haviland Miller. Bloomington: Indiana UP, 1969.
- Erkkila, Besty. *Whitman: The Political Poet*. New York: Oxford UP, 1989.
- Hindus, Milton ed. *Walt Whitman: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1971.
- Hofstadter, Richard. *The American Political Tradition: And the Men Who Made It*. New York: Vintage Books, 1954.
- Holloway, Emory and Adimari, Ralph ed. *New York Dissected* by Walt Whitman. New York: Rufus Rockwell Wilson, Inc., 1936.
- Marinacci, Barbara. *An Introduction to Walt Whitman*. New York: Dodd, Mead & Company, 1970.
- Mason, John B. "Walt Whitman's Catalogues: Rhetorical Means for Tow Journeys in "Song of Myself,"" *American Literature* 45-1, 1973.
- 松永俊男『博物学の欲望－リンネと時代精神』講談社現代新書 1992年。
- Orvell, Miles. "Reproducing Walt Whitman: The Camera, the Omnibus, and Leaves of Grass," *Prospects: An Annual of American Cultural Studies* 12, 1987.
- Perry, Bliss. *Walt Whitman*. New York: Houghton Mifflin Company, 1906.
- Rubin, Joseph Jay and Brown, Charles H. ed. *Walt Whitman of the New York Aurora: Editor at Twenty-two*. Pennsylvania: Bald Eagle Press, 1950.
- ソントグ、スーザン『写真論』近藤耕人訳 晶文社 1992年。
- Stovall, Floyd. *The Foreground of Leaves of Grass*. Charlottesville: UP of Virginia, 1974.
- Trimble, W. H. *Walt Whitman and Leaves of Grass: An Introduction*. London: Watts & Co., 1905.
- White, Morton and Lucia. *The Intellectual Versus the City: From Thomas Jefferson to Frank Lloyd Wright*. Cambridge: Harvard UP, 1962.
- Zwig, Paul. *Walt Whitman: The Making of the Poet*. New York: Basic Books, 1984.